

一月作品

月集スバル



☆今月の四人☆ (小島ゆかり選)

寿老人

影山 一男 千葉

台所の棚のどこかで錆びてゐむ栓抜き、缶切り、結婚指輪
秋の風寿老人のごと歩みきてわが胸を吹き川辺へと去る
マンシヨンに定年の日のいつか来るその時われもわが妻も亡し
政争はわが事ならず木犀の香りに満ちてひと日を終へむ
一本の白き眉毛が伸び始め村山富市を思ふゆふぐれ

黄金の宴

鈴木 竹志 愛知

秋明菊そよりと咲けるわが庭にアサギマダラの迷ひて来ぬか
枯れ葉かと思ひし刹那浮き上がり生きてゐると蝶の飛び去る

石路の蓄ぐんぐん太りゆき黄金の宴はじまり近し

「相棒」がまた始まりてこの秋も夜長のたのしみ消えぬは嬉し
「科捜研の女」はどうやら今年限りと巷の噂になれるこの秋

秋こそおもへ

原賀 瓊子 東京

歪みたる月球と見え、くれむつの雲のすき間に後の月あり
銀杏をむけば緑の宝玉の秋こそおもへ北原白秋

砂糖、塩、何もくはへぬ一品をかならず食みて晩ごはん了ふ
雲切れて午後九時過ぎの(後の月)満月ほどのかがやきに充つ
真夜中や また変容の(後の月)おぼろにかすみ明日は雨ならむ

ばたつく手足

松尾 祥子 東京

二回目のワクチン打ちて弛き身は曇天の空に押しつぶさるる
いくつもの悪夢襲へりワクチンを打ちへろへろの身体と脳
天降りくる月の光の身に満ちて産み月の子はいちじくを食む
犬ハッピー想像妊娠するらしく赤子の声にお乳が滲む

産湯よりあがる赤子のほかほかの身体いだけばばたつく手足

☆

☆



高野 公彦 千葉

太幹のけやきの中を通ふ水 わが身の内の水とひびき合ふ
きのふよりけふへと渡り来しわれが鏡の中よりけふのわれを見る
育ち終へし頃より我は老い始め老い深まれり山鳩のこゑ
もみぢどきけやきもみぢを吹き落とす風聴きをれば鈴の音まじる
もの言はぬ一人夕餉の七年目 食器の肌の冷たき師走

仲 宗角 三重

水島 晴子 兵庫
路地うらに駄菓子屋ひとつなきまぢよここと田舎と老いはののしる
(シードレスぶどう)としるす文字を見てどんなドレスと惑ふわれをり
うつそりと目蓋ひらけり窓向かう柿の実いろの夕景である
マスクには隠れぬ目もとうるほひて皆ゆたか介護者さみは
肩の辺の雲を脱ぎつつしづやかに十六夜のぼるさんの光よ

杜 沢 光一郎 埼玉

新聞はとりてはをれど写真類と読める見出しに眼を通すのみ
5号以下の活字の記事は霞同然にて老いの目にネズミ色にただ見ゆるのみ
総選挙近づきたれど各党派のどこがちがひかたと読みとれず
支持政党たがひにもらさざりにしが妻とゆきし選挙も楽しき思ひ出
眼はほとんど見えないけれど総選挙にはゆかんと思ふ杖にすがりて

武 田 弘之 神奈川

「コスモス」の選者を終へて賜はりし添削の仕事をのしかりけり
をこがまし「コスモス」添削部員として八年間も勤めたること
添削に日も夜もあらず勤めたる思ひ出をわが大切に持つ
「鑛」^{かなしき}にこもる白秋の熱情が奮ひ起したし孫弟子われを
「コスモス」に必要なわれで在り得るや在り得しや知らず六十年経つ

ヒドリガモ枯木灘の山に出来たれども大荒れて低くし群れなすといへり
山中の小さき診療所ひとのみにさらひて村人のこらず消えぬ
なにあらうとかにかくにこの街にとげむとしもとるた診療所で死ねり
ずまへたらこの一億の金をもてしづかなゆたかな側としてゆけ
のどぐろと生妻の煮しめにほのぼのと一日ありけりいづくにゐても

奥 村 晃 作* 東京

上半身殊にも腕を手を使う車いすテニス 頭脳も使う
上地結衣、国枝慎吾相次いで準決勝を制す決勝へゴー
金目指し金取つて顔くしゃくしゃの車いすテニスの国枝慎吾
パラ日本代表選手国枝のゴールドメダル、レジエントの輝り
身体に障害のある芸人のパラリンピックのパフォーマンス良し

森 重 香代子 山口

家門に白彼岸花咲きにけり戻り来たりし人のごとくに
ほんたうに八十五年を生きたのか生まれし日月確かめてゐる
けふ開く文庫本の文字のまた小さくおぼろとなりて齢はすすむ
眼鏡つけしままに眠りて目覚め際触れし面輪を誰ぞと思ふ
バス停まで辿りつかむとよろよろと踏みくだりゆく段丘の径



日影康子 富山

満月と仲秋の名月重なるは八年ぶりにて雲なき夜空

近付くと見し雲去りて昇りたる満月浄し双掌を合はす

歩むもの無き寺庭の淋しけど庭石のわきに咲くホトトギス

かりそめの子の言葉なれど励まさる「おじいちゃんは幸せだよ」に

「子供の頃のあなたの目輝いていましたよ」西能先生の一語忘れず

古屋祥子 群馬

車椅子行く前方を空け呉るる 真木柱ああ太きころよ

情けをば信じむ ときにはありのまま人の情けを深く信じむ

贈られる歌集や 辞書繰り評しるし読み込めば今日も時が足りない

よき人ら住むを思ひていまし存らへて見よう、何が起きるか？

娘と過す刻とき有り難し 食べる、寝る、起きる、加へてトイレの介助

桑原正紀 東京

わが窓の秋空に日々ふとりゆく榎櫃の珠実十二個を数ふ

色づくは笑みのひろがるごとくして榎櫃の珠実わらひめみな笑面

おたふくもひよつともぬてゆらゆらと風にあそべる榎櫃の珠実

日を置きて知らせよと遺言みことばして逝いきし越このうたびと岡崎康行

良寛を慕ひし人柄そのままに岡崎さんはつつましく逝けり



狩野一男 東京

二十世紀梨の鳥取県に行き秋の砂丘をあぢはひたしも

この朝も我を追ひ越す青年よ尻ポケットに文庫本入れ

道に会ふダルメシアンダルメシアンの若犬のスポットさやか秋の日差して

ほほ飲んで昔語りをしさうなるとねりこの上の十三夜月

十月の秋すすみをり深キョンが活動再開したとふ楽し

宮里信輝 神奈川

兄のゐる「特養」からの電話なり「体力弱り入院します」

病院でひとり逝かせつコロナ禍で兄の見舞ひも看取りもならず

コロナにて逝きしにあらざ前立腺ガンと闘ひ肺炎で逝く

集まれる近親のみの五人にて花でうづめつ柩の兄を

ワクチンも二回接種しコロナにて逝きしにあらぬ兄の顔よし

小島ゆかり 東京

消灯ののちは虫の世 暗闇に砂金のごとく虫の音はふる

虫の音のきはまらんととき家中の秒針ふるへいづるならずや

虫の音のちきちちちちちフィルムはあともう少し あをきつきかけ

パンパスグラス大きくゆれて六十年失くしたままのグリコのおまけ

おぼろなる記憶のなかに失くしたる赤ポストありグリコのおまけ

木 畑 紀 子 京 都

餌をさがす三羽の鳩を歌つくる友三人に見立て、おはやう
すいふう咲きつぐ下にかかるは酔生夢死の花むくろたち
みどり葉のあはひの白き泡撮ればアワフキムシとグーグル答ふ
泡吹けどあぶくは心地よいらしくアワフキムシの子の住処とぞ
屋久島も佐渡も行ったつけ寝転んで旅番組見るここ終着地

島 田 暉 神奈川

湯上りてふたりで仰ぐ天の川銀の魚の飛び跳ね止まず
晴れし夜は銀河鉄道に乗りてみむ行き先知れぬ遠き宇宙へ
曇りつづき月見出来ねど待ちに待つ紫式部の眺めたる月
顔面が裏返るほど泣きわめく赤子の意志はただに乳欲る
病室でいつしよに死ぬとわめく顔若く逝きたる母のまぼろし

大 松 達 知 * 東 京

一市民、そんなひびきのこそばゆく二秒で終わる無料の注射
掃除機にそっと吸われてそのちを銀鼠色に灯るほこりは
3KGの亜鈴に白く書かれありたぶんじゃなくてきつと3KG
くれないのポストがひとつ灯りおり靴べら差して靴を履くあさ
クレイムとこころのなかで呟いてクレーム案件ひとつをこなす



田 宮 朋 子 新 潟

秋天よりひかりの黄蝶降りて舞ふ西脇順三郎詩碑のまへ
秋草の繁みのなかのひとところ母のこゑして釣舟草さく
脳葉に秋風わたるさくさくと食用菊のおひたし食めば
縄文の遺跡ちかくの鬼ぐるみ道に小鬼のあたまこころがる
秋霖の針ほそく降る窓のそと柿のこずゑに百舌が来てゐる

津 金 規 雄 神奈川

接種後の腕の鈍痛収まらず見てをり映画「スワンの恋」を
果てもあらぬ夜会の日々を過ごし来て老い深まれり猶太びとスワン
カトレアを符牒にしたる恋ありてその胸元の花に接吻く
アラン・ドロン演ずるシャルリュス男爵は男色家にして青き瞳をもつ
アラン・ドロンと美輪明宏が同年と知りてうべなふ何とはなけれど

小 山 富 紀 子 京 都

へお持ち帰り下さいおからは無料ですへひと玉取ればぬくぬくの玉
店先の無料のおから手に取れば奥の店主が笑みてうなづく
おからにはなにに入れての揚げに葱げふはきくらげ入れてみようか
ていねいにていねいに炒り気をぬかず無料のおから一品にする
数十年毎朝おから数十キロ動物園へ届けし老舗

清 水 正 子 神奈川

越中の酒「苗加屋」を冷で酌む若き家持の知らざりし美酒
「苗加屋」のこの赤ラベル好むとぞキノコ博士の君と飲みたし
宇宙ヨット（イカロス）はたぶん宇宙酔ひわれは酔つても迷ひ子にならず
米どころならぬ相模に美酒なくて嘆きしならむ国司家持は
その父の旅人は「吉備の豊酒」を愛しぬ梅花の宴しのぼるる



小嶋 一郎 佐賀

四、五百歩今朝は延ばすか路沿ひの電柱どもに励まし受けて
よぼよぼとあるなどごとく追ひ越してわが影を踏むミニスカの脚
園児らの散歩に出会ひ十人に挨拶もらひ一度で返す
月曜の早朝散歩を終へ来たり序でながらのゴミ出しもして
界限に散歩をするはわれ一人悠々自適と言ふ者は言へ

後藤 美子 北海道

玄関を入りてより米をとぐまでの動き反芻す家の鍵見当らず
記憶ふつと飛ぶことありて老いはさびし鍵は右手に握りぬし筈
安堵して大根刻む靴置ききの靴の中より鍵あらはれぬ
若者は〈未来長者〉とふ八十代傾く者は〈未来貧者〉ならん
薄き雲出つ入りつして輝けり軒端にあふぐ十五夜の月

福士りか 青森

衣替へに倦みて寝ころぶ服のなか脱ぎつばなしの靴下のやうに
泥棒もここまで荒らさないだらう錦の山なすとどりの服
「ありがとう」と言つてはみるがゴミ袋に放り込めない古いTシャツ
黒タイツばかり十三足ありてリストラ係のごとき逡巡
退職後は十枚の服で足りることと思ひ思へど百越ゆる服

藤野 早苗 福岡

精霊のいま覚めゆかん満月をネイティブアメリカンの名もて呼ぶとき
通知音ひらめくことし枕辺のスマホにハンターズブームン届きて
うぶすなの月夜舗道に影長く小男鹿仔鹿歩みゆきたり
雨予報かつかつはづれのちのつき暈の真中に嫦娥わらへり
青銅の鏡のやうな十三夜 あれは卑弥呼のこゑか聞こえ来

風間 博夫 千葉

「排他的経済水域」北朝鮮軍用飛翔体落下可能海域
〈舢倉島〉とふ領土知る北朝鮮ミサイル三百キロ沖に落ち
渡り鳥あまた来る島舢倉島周囲五キロの国境の島
一時間半ほど輪島から船に乗れば着きたり能登舢倉島
舢倉島輪島市海士町海女の島百人ほどが暮しゐる島

田中 愛子 埼玉

スルーした知らざる花がまた次の歌にあらはれスマホで調ぶ
ひとたびも開かぬままの巻あるも百科事典は書庫のいしずゑ
静止画と思ひみつむる映像に妃殿下ひとつまばたきしたり
しづやかに流す夜の金賢重のファルセットはも銀のきりさめ
ノーベル賞ウィークとなりて取り出だすずつと読みさしの『百年の孤独』

橘 芳園 新潟

雲を見て死を思ひをり死といふはあなかつたわがあなくなること
これの世のなごりにわれの血を吸ひて忘我せるまま打たれたり蚊は
死後ありといふ人なきといふ人もはつきりせぬをはつきりといふ
戦死せし子が待つ浄土を疑はぬ祖母の死顔やすらかなりき
京都よりかかりし電話の叔母のこゑおだしきこゑは亡き母のこゑ

水上 比呂美 東京

こんな梨はじめて見たよ荒尾梨尺玉花火のやうな大きさ
『純黄』の椽二の歌に詠まれたる朝食の荒尾梨四分の一
英子氏が剥き給ひしや荒尾梨一キロの梨をつかむ細き手
「あらおいしい梨ね」このたまふ英子氏の声が聞こえぬ梨の中より
秋晴れの楽園のごとき丘のうへ那由多の幸が静かに灯る

水上 芙季 東京

似合はなくなつたスカート吊るされて十月昼の寢室しづかり
ビンゴの窓の向かうに秋の声聞こえて心の月が光るよ
自販機にすいすい新札吸はれゆき 北ゆ白鳥渡り来るらむ
後輩が「すごい風」つて預言者のごとく言ひたりわれには見えず
夕暮のメリーゴーランドゆうわりと上下に揺れつつ秋空へ浮く

大野 英子 福岡

遙か沖の志賀島から陽は射してやがてわたしへ及ぶまで待つ
カーテンコールのごとけざやかに内海を明るくひらくはつあき朝日
湾岸を歩くわたしを照り翳りさせる都市高速を過ぎゆく車両
死者たちの御魂ときはなたれしごとアキアカネ群るる墓苑の昼を
しなだるるカノコユリ伐り枯れ色のめうがを抜いて夏仕舞ひする



島田 暉歌集 令和3年6月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

戦あらずな コスモス叢書第1197篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一-14-16

高野公彦歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

水の自画像 コスモス叢書第1199篇 短歌研究社

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二-1-21-506

小島ゆかり歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

雪 麻呂 コスモス叢書第1198篇 短歌研究社

著者住所 〒184-0004 東京都小金井市本町六-1-101-W302

松尾祥子歌集 令和3年7月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

橿円軌道 コスモス叢書第1196篇 角川書店

著者住所 〒168-0065 東京都杉並区浜田山一-121-14